



本県は、明治5年に滋賀県と犬上県が合併し、現在の県域となって成立して以来、令和4年9月に県政150周年を迎えました。琵琶湖を中心に、山に囲まれ、川や里山のつながりをもつ自然環境の恩恵を受け、明治から続いてきた本県の歴史を、この機会に振り返り、未来に受け継いでいかなければなりません。

令和4年7月には国連食糧農業機関（FAO）により、琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業「森・里・湖（うみ）に育まれる漁業と農業が織りなす琵琶湖システム」が「世界農業遺産」に認定されました。

滋賀の風土と歴史の中で受け継がれてきた、千年以上の歴史を誇るエリ漁等の琵琶湖の伝統漁業、豊かな生物多様性を育んできた「魚のゆりかご水田」や「ふなずし」などの伝統的な食文化に加え、琵琶湖を守る現代の取組として「環境こだわり農業」や森林の保全活動など、多様な主体によって継続されてきた取組の成果が世界に認められました。

さて、これまでの取組により、琵琶湖の水質は長期的に見て改善傾向にありますが、在来魚介類の生息環境の問題や外来生物の増加、森林資源の活用など、本県の環境は様々な課題に直面しています。また、集中豪雨など、急速に進行する地球温暖化による気候変動の脅威は、本県の自然や県民生活に大きな影響を及ぼしており、それに対処することは喫緊の課題となっています。

こうした課題に対応していくためには、これまでの「いかに環境への負荷を抑制するか」の視点に加えて、「いかに適切に環境に関わるか」という、より広い視点に立って、施策を進める必要があります。

琵琶湖版のSDGsとして、令和3年7月にスタートした「マザーレイクゴールズ」（MLGs）は、「琵琶湖」を切り口とした2030年の持続可能社会への目標であり、県民、事業者、NPO、行政等の多様な主体が琵琶湖の課題解決に関わる仕組みです。本県の美しい自然を守りながら、地域資源の価値や魅力を高めるとともに、それらを活かすことでわたしたちの生活を活性化させ、豊かで美しい琵琶湖を次世代へと引き継いでいけるよう、MLGsの目標達成に向けた努力を積み重ねていきたいと思えます。

また、地球温暖化の防止に向けては、温室効果ガス排出量の削減に取り組んでいく必要があります。本県では2050年までに温室効果ガス排出量実質ゼロ（CO₂ネットゼロ）、2030年度に50%減（2013年度比）を目指し、令和4年3月に「滋賀県CO₂ネットゼロ社会づくり推進計画」を策定しました。単に温室効果ガス排出量を削減するだけでなく、「持続可能」「グリーン・リカバリー」「地域循環」の視点を重視し、地域や産業の持続的な発展にもつながる「CO₂ネットゼロ社会」の実現を目指していきます。

本書が、環境保全や琵琶湖への関心と理解を深め、今後の活動に大いに活用されることを願っています。一緒に頑張りましょう。

令和5年（2023年）1月

滋賀県知事

三木大造